

マラヤ華人文芸の発展と背景Ⅱ 1929—1931

荒 井 茂 夫

要旨 国共分裂が華僑政治社会に与えた影響は、1)マラヤ国民党支部右派の再起、2)商界を中心とする新しい指導者の出現、3)そして南洋共産党からマラヤ共産党に到る華僑左翼政治の新たな展開などである。そして植民地政府の干渉がかかる状況を貫いていた。この時期の華人文芸は、左翼政治の指導性の明確化に伴い、旗幟を鮮明にしてプロレタリア文芸の建設に向うのである。しかし左翼政治の側では、運動が華僑社会内に限定されているという批判に答えるために、マラヤの他人種に対する浸透、組織活動に注意が向けられるようになった時期であることや、華僑の定住化が南洋独自の価値の創造に繋がるという観点から、南洋の地方性の表現が主張されるようになった。そしてこうした文芸活動の推進力となったのは、やはり政治活動との接点に位置する中国から来た青年教師達であり、その文芸思潮も中国の影響を反映したものであった。しかし植民地政府の取締りによる政治運動の挫折に従い、文芸も低迷した状況に陥るのである。

- 1 前言
- 2 国共分裂の影響と華僑政治
 - イ) 右派の再起と方向
 - ロ) 華僑政治社会のリーダーシップ
- 3 左翼政治と華人文芸
 - イ) 左派の方向
 - ロ) プロレタリア文芸の発展と特徴
- 4 結 語

1 前 言

マラヤ華人文芸の誕生は、中国本土の華僑社会に対する影響関係の歴史的発展の中に位置付けられるものであった。文芸拡張期（1925—1931）の前半（1925—1928）の中国本土との関係における主な事件は国共合作であった。その影響によって、国民党マラヤ支部は左派主導となり、過激な政治活動に突出した。一方文芸は中国文壇から息吹が伝わり、初期創造社的要素を表現した文芸副刊が現われ、1927年3月のクレタ・アヤ事件の後には、中国の革命文学の潮流に沿って、プロレタリア文芸を標榜する副刊が前後して十数種も出現する。その質はとにかく、中国新文学の当時の諸要素が一時に噴出したのである。この間の状況は前稿で検討した⁽¹⁾。

本稿では、引き続いて拡張期後半（1929—1931）の華人文学状況を、国共分裂の影響と華人政治社会の様相との関連を踏まえて検討を加えてみたい。

2 国共分裂の影響と華僑政治

イ) 右派の再起と方向

国共合作がマラヤの華人政治運動にもたらしたものは、反帝国主義という新しい方向と運動の高揚であったが、同時にその鋒がイギリス帝国主義に向けられたために、国民党支部と華僑教育に対する植民地当局の干渉を招くことになった。また合作後のマラヤ国民党支部は、若い労働者、教師、教育関係者が中心となり、商人は一部だけであったから、労農合作やブルジョワ打倒が議論されている党内部には、商界を代表する意見などは皆無であった。植民地で反英闘争に参加することは商界の死活に係わることであり、合作国民党の反英帝国主義を支援するわけにはいかなかったのである。そればかりか、商人の密告による左派の逮捕、追放事件が屢起⁽²⁾、この時期の国民党と商界の間には深い溝が出来ていたのである。

こうした時期に、中国本土では蒋介石が反共クーデター（1927.4）を發動し、引き続き国民党の清党運動が始められたのである。同年8月には左派の武漢政府が中国共産党と絶縁して南京政府と合併するに及び、国民党の反帝運動は廃棄された。さらに国民党第四次中央執行委員会全体会議（1928.2）において、国民党は1924年1月の国共合作以前の党の精神に復帰することを確認し、国民党第三回全国代表大会（1929.3）では、一切の民衆運動から「闘争」の文字を除去し、続く同年末の第二回中央全体会議では、全ての団体は地方党部或は行政官署において、三民主義に対する忠誠を誓うことによって活動が許可されることを決定した。こうして三民主義が政策の前面に押し出されたのである。

一方、中国共産党中央は、1927年8月に緊急会議を召集し、指導を誤ったとして陳独秀を除名した。9月には毛沢東の労農軍が江西省井岡山に根拠地を築き、翌年1月には朱徳が、続いて12月には彭徳懷の赤軍第5軍がこれに合流し、中共は赤軍を中心に党勢を回復していった。さらに1930年までには江西、湖北、湖南、広東、福建、安徽、河南などの各省に15の解放区を形成して、国民党南京政府との対立の時代を迎えるのである。

国共分裂は直ちにマラヤに波及した。清党後の広東の国民党南洋総部は、マラヤ国民党支部に対して党内の共産主義者の追放を指令したのである。これによってマラヤ国民党の旧支部は再起し、党員の再登録が行なわれ、1928年初頭にはほとんど清党を完了した⁽³⁾。海峡植民地華僑事務当局の記録によると、清党の方法は党員の再登録による中央に対する支持の表明以外には採られていない⁽⁴⁾。左派に対する圧力は、むしろ植民地警察の取締りの効果に頼ったのであるが、そこでは当然右派からの告発が効果的な役割を果たしたのである。

華僑社会は全般的に国民党の清党は国益に適ったことであるとして歓迎した。蒋介石の34万円の反共公債発行に際しても、中華総商會は協力することを決定（1927.5）したし、さらには74万海峡ドルを北伐支援の為に送金（1927.6）したのである。こうして、国共合作以来マラヤ国民党支部の表舞台から下がっていた、商人層に根を張るマラヤ国民党右派は再起をはかり、北伐の完成と中国の統一の誇りを背景にして、公然と組織活動を展開し始めたのである。その結果、国民党南洋総支部は国民党英属総支部と改称され、1929年1月第一回代表者會議が開かれた⁽⁷⁾。こうした活動の様子は、民国日報（党紙）等の華字紙を通じて報道されているにも拘らず、植民地当局が取締りを行なわなかった理由は、左翼活動の摘発に対して彼等が一定の役割を果たしていたからであろう。ついで1930年2月5日には、マラヤ各支部から40人の支部主腦がシンガポールに集まり指導者會議が開かれた。これもやはり華字

紙を通じて報道されたのだが、非合法団体の活動の誇示は、無論いつまでも許容されるものではなかったのである。正にその指導者会議の開催された当日に新総督として着任したサー・セシル・クレメンティは、これに対して厳しくのぞんだ。2月20日には国民党総支部指導者17人を召喚して、マラヤはイギリスの統治下にあり、国民党系の如何なる政治組織の存在も容認されないと申し渡し、集会、宣伝、募金など一切の活動を禁止し、全支部の解散を命じたのである。これに対して張永福、鄭螺生、方之楨等の国民党支部指導者達は、「国民党組織の存在意義は共産主義組織に対抗することにより、破壊分子の存在を暴き出して、当局の治安維持に貢献している」ことを理由に活動の容認を求めた。⁽⁸⁾しかしクレメンティ総督は、張永福、鄭螺生⁽⁹⁾は英国籍でありながら国民党に参加し、英・中両国に忠誠を誓う「双頭の蛇」であると揶揄し、解散は問答無用の厳命であると申し渡したのである。こうしてマラヤ国民党支部は暫時解散を余儀無くされた。指導者の鄭受炳等は追放され、張永福も自からマラヤを離れて行った。この様に国民党支部の指導層が急速に弱体化した為に、国民党中央は1930年10月、マラヤ支部の一時閉鎖を決定した。⁽¹¹⁾

この間胡漢民の努力で中国外交部長王政廷とイギリス代表ランプソンの会談がもたれ、その結果1931年2月、植民地内での集会や党員登録、署名運動や募金等の禁止を条件として、マラヤ以外の国民党組織への加入が認められることになった。しかしこれは支部活動にとっでは何の益もないものであった。結局同年1月と5月に国民党中央から呉士超が派遣され、直属支部を八ヶ所（シンガポール、ペナン、マラッカ、ベラク、セランゴール、ネグリセンビラン、ジョホール、ケダ）に設置して活動を継続させることになった。これに対してもクレメンティの取締りは厳重であった。各地で組織が摘発され、多くの党員、指導者が追放され、次第にその活動は低迷して行ったのである。⁽¹²⁾

クレメンティの国民党弾圧の理由は、陳伯萍の指摘に従うと、1)彼が香港総督時代（1925-26）に、香港経済に危機をもたらした大ストライキの背後で活動した国民党に大いに悩まされたことから、国民党に対して偏見を持っていたこと、2)マラヤの国民党は、1925年すでに非合法化されているに拘らず、公然と活動をしていることは、イギリス植民地政府に対する挑戦であって、政府の威信にかけて容認できない、3)国民党の増長は「国中国」（「主権内主権」）を造成することになりかねないこと、また華人社会を背景に反英運動を扇動することを恐れたためということである。⁽¹³⁾植民地政府にとって最も憂慮されたのは第3項の理由であったろう。これは19世紀末の会党取締りの理由でもあったが、この観点から見れば、共産主義活動も含めて、マラヤ国民党の活動も植民地政治においては異物の増長を意味するものであった。

1920年から1930年代初期の植民地政府にとって、勃興する華僑社会の民族主義教育は、マラヤを中国の第19の省として見做して進められていると認識されたのである。⁽¹⁴⁾もちろんこうした見方には反対する議論もあるが、⁽¹⁵⁾確かにマラヤを中国の属邦、或は取得す可き領土と見るような思想は華僑教育界に存在したのである。当時華僑教育の中心であった暨南大学（江蘇）の学長鄭洪年は、同大学に「南洋及アメリカ文化活動局」を創設して華僑社会に対する文化教育を進めるのだが、その思想は極めて膨脹主義的であった。まず「ジャワは中国人によって建設されたが、オランダ人に盗られたのだから、中国人は取戻さねばならない」⁽¹⁶⁾という歌詞を、その校歌に組み入れていることが、それを示していると言えよう。さらに同局の設立宣言を概観すると、1)ヨーロッパ人が到来して以来、中国人は南洋での政治力を失った。

今また経済力まで失わんとしている。以前白人は熱帯に居住することが出来なかったが、今では中国人にできないような科学的方法を用いて経済活動を進めているし、さらには日本の南進にも直面している。2)華僑は西欧人或は現地人に同化する傾向があり、文化的衰退に直面している。3)中国政府及び中国国民は中国民族の拡張に対して無関心である。4)華僑は中国国民の一員であり、華僑の抱えている問題は全国民の問題である、と謳っている⁽¹⁷⁾。そしてこのような思想に基づいてなされる可き行動は、1)文化教育活動によって華僑の力を強める。2)南洋に関する全ての資料を収集して南洋の教育制度を統一し、大学教育に適応できるようにする。3)これら華僑の植民能力を高める為にあらゆる努力を払い、さらに南洋を国内に紹介して移民の促進を計る、という内容のものであった。中国民族が更に海外に進出し、華僑が祖国を助ける力となるべく競争力を付けさせることが目的であったのだが、そこには土着の民族に対する配慮は欠けているし、むしろナショナリズムの膨脹主義的意識を感じさせるものである。ただこれが国民党の華僑政策として普遍性を持ったものであるとは言い難いが、結局華僑の中国に対する忠誠を確保しようとする国民党の努力は、濃厚な民族主義教育となって現われざるを得なかったのである。またその具体的表現である中国の祝祭日等の行事が頻繁に举行されることは、英国旗の下に多人種の秩序を維持しようとする植民地政府にとって放置できないものであったということである。

とまれクレメンティの弾圧によって、マラヤ国民党支部の活動は水面下に降り、学校、書報社や社交クラブ等を隠蓑として組織の維持が計られたのである。学校や書報社はこれまで屢言及して来た国民党の伝統的な活動の場であり、社交クラブはこの時期に華僑政治社会において重要な役割を果たす新しい場である。本来は華僑商人達の伝統的交流の場であったが、クレメンティの国民党支部弾圧のために、その役割が否応なく浮上して来たものである。例えば後述する陳嘉庚の怡和軒倶楽部、邱国互・陳延謙の吾廬倶楽部、胡文虎の維基利倶楽部、林文田・吳勝鵬の海天游芸会、林義順の醉花林倶楽部等がよく知られている⁽¹⁸⁾。

吾廬倶楽部と中国民族主義運動との関係は辛亥革命以前からあった。邱国互は海運、米穀業で財を成し、林義順、陳延謙、林文慶等と華僑銀行を設立（1919）し、金融業界の重鎮となった実業家であり、また古参の中国革命同盟会会員であった人物である。また陳延謙も同じく同盟会会員であった⁽²⁰⁾。林義順は同盟会以来の党人でマラヤ国民党支部の重要な指導者の一人であるし、その他の人々も皆親国民党の民族主義者なのである。そして同時に伝統的幫組織や商界における指導的地位にある人々であった。

これらのクラブの活動は互いに衝突するようなものではなかった。会員も幾つかのクラブに重なっている人が多い。本来商人の交流の場であるのだから、やはり商業上の情報交換が一義的な意味を持っていたのである。そして、マラヤ国民党支部活動が潜行する時期において、こうしたクラブが中国の政治情況に呼応して愛国運動を発動する主役となってくるのである。

ロ) 華僑政治社会のリーダーシップ

孫文の中国革命運動以来多大の犠牲をはらって政治運動に従事し、マラヤ国民党支部を指導して来た商人達が、国共合作に反対しながら、孫文の強圧的な指導の下に左派の主導を容認せざるを得なかったことは、彼等にとって屈辱以外の何物でもなかったろう⁽²¹⁾。であるから、国共分裂による清党運動の指令は彼等の自信を回復させ、直ちに再起が謀られたのである。そして1928年5月3日済南事件が起ると、それを期に活発な活動を展開し始める。事件後中国

国民党中央宣伝部は、海外の国民党支部に対して排日運動を指令し、特にこの為に上海に国際電訊社を設けて南洋華僑との連絡を密にし、宣伝材料を提供した。華僑社会に対する呼びかけは穏やかな形で、シンガポールの中国総領事李駿からなされた。「海外僑胞は自ら冷静にして中国政府の事件に対する正当な解決を待つ可し。然れども経済絶交に至っては各人の愛国心によって行なうものなるを以て、余の関知せざる所なり。これ以外の事に関しては一切の輕拳妄動を為す勿れ⁽²²⁾」という内容の通告が、中華総商会をはじめ各華僑団体及び新聞社に送付され、対日経済制裁行動の展開が慫慂された。こうして5月10日前後から「平和的経済断交」の名の下に、日貨ボイコット運動が全マラヤに拡大して行ったのである。運動は書報社系の青年や視察団の監視によって徹底され、違反者には初犯に対しては忠告、二犯に対しては店頭で汚物散布、三犯に対しては耳切り落し、四犯は殺害という「四犯主義」を以て臨んだ。またマラヤ各地で中華総商会の主催による国貨展示会が開催され、中国製品の使用が奨励された⁽²³⁾。

運動は、植民地政府の華僑政治に対する不断の監視の中において、国民党支部の公然とした指導の下に行なえるものではなかった。しかし積極的な愛国主義は華僑社会上層の全般的傾向であり、その中に位置する国民党指導者グループは、当然重要な役割を担ったのである。これに加えて、中小商人、中国領事、中国から派遣された運動指導員等も参画し、各種団体の組織力を使って運動は進められたのである。そして運動の中心的役割を果たしたのが、当時陳嘉庚の主宰する怡和軒俱樂部と、そこに組織された「山東慘禍籌賑会」であった。

怡和軒俱樂部は、本来1895年に華僑富商の娯楽、交流の場として設けられたものであったが、陳嘉庚が1923年に同クラブの総裁になると、当時優勢だった福建幫の人士ばかりでなく、各幫の指導者も吸収して幫の境界を破り、社会的に影響のある、政治性を持った愛国団体に変貌し始めるのである⁽²⁴⁾。主な会員を見ると、陳楚楠、張永福、林義順、李振殿、林慶年等は国民党支部支導者であり、その他胡文虎、林文慶、陳延謙、林文田、薛武院等も皆親国民党の愛国者であると同時に各幫を代表する資本家であった。

陳嘉庚自身も1910年に中国革命同盟会に入り弁髪を切った人であった。国民党には参加しなかったが熱烈な愛国者であり、またゴム事業で成功した富商であった⁽²⁵⁾。彼自身の基盤はシンガポール・ゴム公会にあった。シンガポールのゴム業者は福建人が圧倒的で、彼は同公会の中でも草分けの成功者であった。その為に彼の一族或はその系統から発展したゴム業者がほとんどを占めていたのである。このゴム公会が彼の政治社会運動の基礎となったのであるが、経済的な面ばかりでなく、人的にも優れた助手がいた。組織の面では候西反、財政手腕に優れた李振殿、情宣活動の周献端、彼等はゴム公会の役員でもあり、また国民党支部の指導的立場の人達であったが、そのまま陳嘉庚の運動の助手となって力を発揮したのである⁽²⁶⁾。陳嘉庚の指導する愛国運動は植民地当局に容認されたのだが、その理由は、1)彼が英国籍を持ち、第一次大戦中にイギリスの対独戦に義捐金を募って献貢したこと、2)1918年にはJ. P (大平局紳. Justice of Peace) となり、さらに1923年には華人参事局(Chinese Advisory Board)の委員となって植民地政府要人との接触が深く、敬意をもって見られたこと、3)彼は国民党員ではなく、従ってその運動は国民党の政治運動としてではなく、救亡運動として認められたこと等によるものである⁽²⁷⁾。

済南事件をめぐる排日運動は、マラヤの華人政治の指導力が、本来の国民党及び商人層に戻ったことを示す。同時に「山東慘禍籌賑会」に対抗して「南洋救済山東被難群衆募捐委員会」

を組織し、別に華僑大衆の支持を得ようとする南洋共産党の活動との二つの政治勢力の形成を明らかにした。しかし共産党の活動に対する取締りは厳重で、その募金活動には自から制限があり、クレタ・アヤ事件以来の華僑大衆の不信も重なって大きな運動には発展し得なかったのである。一方「山東惨禍籌賑会」は、有力華僑はもちろん、中小商人も月収の三分の一を割き、労働者、店員は給与の一割を寄付するように指導され、6月から9月までの期限を過ぎても献金は止まることなく、10月下旬には募金総額は108万海峡ドル、献金者は7万人に上ったという⁽²⁸⁾。またこれとは別に、1928年6月に発行された国民政府の救国建設公債に對しては、9月から11月の間に購入応募額は170万元に上った⁽²⁹⁾。こうして陳嘉庚の怡和軒俱樂部を中心とする運動は成功する。その理由は植民地政府に許容されたことばかりでなく、根本的には怡和軒の会員が各幫の指導者であり、且つ富商達であったことであろう。

この様な華僑商界全体の運動の中で再起した国民党勢力に対して、クレメンティ総督は弾圧加えるのであるが、決して商界の意見を考慮せずに行なったわけではなかった。彼は国民党支部の取締りについて、華民保護局（The Chinese Protectorate）を通じて非国民党黨員の有力な華僑商人達の意見を求めた。それによると、1)中華総商會會長李偉南は、政府の政策に賛同し、華僑は現地の法律を守り、国民党に参加す可きではない。華僑商界は政府の対国民党政策に殊更に興味を持っていないし、一般商人は中国と政治的關係を持つとは考えていない。しかし中国が安定した政府によって統治されることを願っている、と答え、2)前會長の薛武院は、彼自身国民党の政治活動に参加する意志のないことを表明し、中国の政治に参加したいならば帰国して参加す可きであるとした、3)さらに陳嘉庚は福建會館主席として、クレメンティ総督の政策は国民党黨員の利益に係わることであって、華僑社会一般は無関心である、と答えている⁽³⁰⁾。

マラヤ国民党支部指導者のほとんど全てが商人であったが、決して商界全体を左右する程多数を占めていたわけではなかった。商人達にとって、祖国を愛し、その為に尽力するという点では共通するが、党という極端な政治性を共有することには困難と危険があったのである。華僑商人は本来植民地經濟に従属し、その恩典で發展して来たものであったから、中国政治に巻き込まれて植民地政府の政策と衝突することは、その商業權益を根本から失うことに繋がるのである。国民党政治とは一定の距離を保つことは非黨員商人にとっては保身の為の当然の立場であろう。しかし決して反国民党ということではない。ところでこの諮問には国民党支部黨員を浮上させる効果があった。クレメンティは商界に篩をかけてみたのである。加えて嚴重な取締りと追放という切札の前に、国民党支部の活動は停滞し、結局個別の黨員や一部指導者は国民党党籍を離脱して、陳嘉庚の指導する運動の傘下に流入して行ったのである。その結果、陳嘉庚の指導力は急速に高まり、華僑政治社会運動の大きな力となって行ったのである。

国民党支部ばかりでなく、左翼政治情況も低迷するこの時期に、新たに現われたのが陳嘉庚と怡和軒俱樂部を代表とする隠健な商界主導の華僑政治のリーダーシップなのであった。しかし視点を変えて見れば、国民党的要素は商界活動の日常性に溶け込んでいて、中国の政治情況に応じて、必要な運動が展開される時になって力量を発揮するようになった、と言うことができよう。

3 左翼政治と華人文芸

イ) 左派の方向

マラヤの左翼政治運動は、中国の五四運動以来の民族主義運動のマラヤにおける展開の中から生まれて来たものである。

第2インター(1920)において、アジアの植民地地域の革命運動は、ヨーロッパ資本主義の資源の後背地を攪乱し、ヨーロッパ革命を成功に導く手段として位置付けられたのであるが、コミンテルンとアジア植民地地域との具体的な連携の試みは、1922年の極東工作者会議にアジア各地の代表が参加してからであった。⁽³¹⁾さらにプロフィンテルンが設立され、上海に汎太平洋労働組合事務局(1924)が設けられてから、マラヤでも中共党員の影響の下に、華僑左翼グループが統一的労働組織の構築を計るようになったのである。その結果1926年南洋総工会(南洋各業職工会)が結成され、⁽³²⁾運動基盤の形成が進められるようになった。しかし、この間の左翼政治の活動母体はマラヤ国民党支部組織であり、国父孫文のカリスマ的イメージを利用することによって、華僑の民族感情に訴えつつ宣伝、組織活動を展開していたのである。1925年にコミンテルンの東南アジア代表タン・マラカが、中共に対して工作員の派遣を要請したのは、マラヤという複合人種社会における運動の希望を、華僑左翼運動に見出したからなのである。⁽³³⁾つまり組織的運動の発展が可能なのは華僑だけであって、第2インターの路線を推行する為には組織の拡大と浸透が、マラヤにおける急務であったのである。そして華僑社会における五四運動以来の民族主義的気運の高揚と国民党支部の組織は、その絶好の下地となったのである。こうした流れの中で、1926年に青年共産同盟が組織され、学校や夜学を中心に若年層に対する浸透を進めたのである。その主要な役割を果たしたのは青年教師達であったことはすでに述べた。⁽³⁴⁾

ところで国共分裂による左翼活動にとっての直接的な打撃は、それまで依拠していたマラヤ国民党のシステムを失ったことである。そして植民地当局の厳重な取締りの前に、運動自体後退せざるを得なくなったことである。こうした危機的状況に対応する為には、⁽³⁵⁾コミンテルンは中国から工作員を派遣し、その結果1928年1月に南洋共産党が結成された。同党は東南アジア全域を管轄下に置き、本部はシンガポールに置かれた。そのマラヤにおける役割と効果は、左翼組織運動を集中させ、旗幟を鮮明に出して方向性を明確にしたことであるが、それは華僑のナショナリズムを梃とする浸透路線から、「シンガポールに赤色政権をうち建て、ソヴィエトを樹立し、⁽³⁶⁾資本家と闘争してイギリス帝国主義を打倒する」という急激な変化であった。このために過激な行動が展開されるようになる。同年2月には同党指導者の一人である張玉階が、中華総商会で開かれた国府代表伍朝枢の歓迎式の席上爆弾を投げ、拳銃を乱射するという暗殺未遂事件が起り、さらに未遂に終るが胡漢民に対しても暗殺行動がとられた。⁽³⁷⁾また3月にはタイピンで国民党総支部執行委員の一人鄭受炳に対して海南人共産党員が爆弾を投げる事件が起った。⁽³⁸⁾こうした国民党に対する報復的行動が展開される一方で、2月から4月にかけて南洋総工会の指導の下に、客家人製靴労働者がストライキを展開し、海南人、広東人の同業者も巻き込んで大規模な運動になり、デモ隊は爆弾を投げ拳銃を発射して警察と衝突するまでにエスカレートしたのである。⁽³⁹⁾その結果、南洋総工会をはじめ左翼組織は非合法化され、さらに厳重な取締りの下に置かれるようになった。植民地当局の対処策は逮捕、追放であった。追放されれば中国に到着すると同時に国民政府当局に処分されるという、会

党の時代以来の効果的な方法であった。

左翼運動の後退は、8月3日の済南事件3ヶ月記念大会の不成功がよく示している。その日は労働者の時限ストと商店の時限営業停止、学生に対しても授業サボタージュと集会参加が呼びかけられた。しかし海南人を中心に三百人程の小規模な集会に終り、10月のスト、集会行動も不成功に終わったのである。⁽⁴⁰⁾ 済南事件をめぐる運動は、明らかに華僑の民族感情に訴えるものであるに拘らず、華僑大衆がこうした左翼愛国運動に呼応しなかったために、商界を中心とする隠健な日貨ボイコット運動の方に流れを奪われたのである。

マラヤの混迷した左翼政治情況に直面して、コミンテルンは東南アジアの革命運動全般について検討を加える。夙に国共分裂から共産党が設立される過程において、コミンテルンは、マラヤの運動は華僑が中心であって、大衆的要素から離れ、幅広い労農組織の形成を怠っていると批判し、さらにマラヤの他の人種を戦列に加えること、及びコミンテルンと密接に連携することを命令していたのである。⁽⁴¹⁾ しかし現実の情況は華僑左翼運動の行動が突出して混迷を深めるばかりなのであった。そのため1928年8に開催された第6インターでは、植民地における革命運動にとっての急務は、組合と大衆に影響力を持った強力な共産党を組織することであり、困難や失敗の原因は、未熟さや経験の少なさと外部からの援助の不足にあるのだから、上部党組織の強力な支援なしでは勝利できないとした。⁽⁴²⁾ こうして1930年4月、シンガポールで南洋共産党第三回代表者会議が極秘裡に開かれ、南洋共産党は解散され、代わりにマラヤ共産党とインドシナ共産党が発足したのである。後者には自主決定権が与えられたが、マラヤ共産党はあくまでもコミンテルンの極東ビューローに直属して、その監督下に置かれることとなった。⁽⁴³⁾ これは前述したように混迷したマラヤの左翼陣営を、コミンテルンがその強力な指導で立て直そうということであり、また華僑左翼政治に対する批判でもあった。そしてこれより以後、マレー語による宣伝文書が急速に出始めるのである。この時同時に南洋総工会はマラヤ総工会に改組され、やはり汎太平洋労働組合事務局の直接指導下に置かれ、特にマレー人労働者の獲得に重点が置かれるようになるのである。⁽⁴⁴⁾

マラヤ共産党が結成された1930年前後は、世界恐慌を背景に新たな活動を展開する絶好の時期であったが、同時に植民地政府の取締りも一層厳重になった時でもある。加えて植民地政府が大量の華僑失業者を中国に送還し、婦女子以外の入国を制限することによって失業問題に対処したこと、そしてコミンテルンの方針が、宣伝、浸透、組織再建路線を採用したために、この年の主要な活動は学校に集中した。

シンガポールでは華文中学同盟が捜査され、ソヴィエト・ロシアの教育を指針として、教育の自由の為に闘う組織結成計画が発画し、4月には新僑中学が捜査され42人の海南人が逮捕され、多くの文書が没収された。さらに10月には華南学校が捜査されて拳銃数丁と宣伝文書が押収され、青年教師学生を含む20人が逮捕され、マラヤ共産党の重要な細胞組織であることが判明した。⁽⁴⁵⁾ ひき続き学校捜査と教師の資格剥奪などの摘発が相次ぎ、明くる1931年1月には、名門華僑中学で紛争が起った。

発端は、同校理事会（理事長陳嘉庚）が学校再編の通告を紙上に掲載し、全教員の解雇と学校からの退去、及び新教員の配置予定を明らかにし、さらに全学生に対して寮からの退去と身分保証人を立てて再登録することを申し渡したことであった。学生達は壁新聞を作り、教師や理事を誹謗し、校長追放を叫んで学校・寮をほとんど占拠する勢いとなった。そして理事会と話し合いが行なわれ、学生達は通告事項の撤回を要求し、さらに学生の教師選択の

自由、集会・言論・印刷物発行の自由、及び学寮費の値下げ等を要求した。理事会側は逆に問題の本質である教員の再編等の通告事項撤回要求を取り下げなければ学校を封鎖すると申し渡し、結局話し合いは分裂した。これに対して植民地当局は静観していたが、遂に立ち入り捜査を行ない、3人の学生を逮捕し、全員を退去させた。そして学校再編の結果、3月の始業時には2名の教師を除いて全てが新任に入れ替わっていたという⁽⁴⁶⁾。ところで、事件の経過を見れば分るように、それは洗練された活動パターンであると言える。背後には当然教師の指導があり、またそうした活動の猖獗の故に理事会側は学校再編を計ったのである。

こうした学校・教師を中心とする事件は全マラヤで起り、1931年中に8校が閉鎖され、多数の教科書が使用禁止処分を受けた。

突出した政治行動がもたらした運動情況の混迷からマラヤ共産党の基礎的な浸透と組織形成による立て直しの方向に進んでいたこの時期に、共産党の活動に壊滅的な打撃を与える事件が発生した。1930年6月1日コミンテルンのフランス人工作員Joseph・Ducroux（またはSerge Lefrance）が植民地当局に逮捕され、東アジア及び東南アジアの共産党組織網全体について自白したのである。このため香港ではコミンテルンの極東ビューロー南方局が摘発され、中国国民党政府は上海のコミンテルン極東ビューローと汎太平洋労働組合事務局を摘発して多くの工作員を逮捕したのである。マラヤではマラヤ共産党指導者14人が逮捕され、活動機能は停止してしまう。以後マラヤでは1932年に汎マラヤ幹部会議が開催されるまで低迷情況に陥るのである。

ロ) プロレタリア文芸の発展と特徴

華人文芸拡張期前半（1925—1928）の間の情況は、中国文芸思潮の諸要素が同時に噴出したのであるが、その中に二つ方向があった。一つはマラヤ化志向であり、一つはプロレタリア文学であった。マラヤ化志向は革命文学の波に流されて、独自の発展は停頓したのであるが、拡張期後半（1929—1931）には、プロレタリア文学の急速な興起とともに新たな装いで登場する。

国共分裂に続いて南洋共産党が結成され、独自の旗幟が鮮明となり、さらには混迷の内にマラヤ共産党が誕生するこの時期は、マラヤの現実には注意が向けられるようになるのである。それはプロレタリア文学の方法で表現されるのであるが、その方向性が確立される過程における議論を、『文芸週刊』（南洋商報副刊）、『椰林』（叻報副刊）、『野葩』（星洲日報副刊）等の主要な文芸副刊を通して検討する。

文芸週刊の目標は「血と汗で南洋文芸の鉄塔をうち建てる」というもので、編集者の曾聖提は「ためらうことなくヤシの長い林を突き抜け、アスファルトの道を、黒煙をあげる工場に向って進み、陽もとどこかぬ坑道に降りて行こう。人はそこに真理を見るだろう⁽⁴⁸⁾」と言って、文芸作家は労働者の生活に沿って現実的な作品を書き「刀、銃、血、屎等の浅薄な描写の革命文学」から脱して、階級的視点から社会矛盾をとりあげることを主張するものだが、その同人の中でも曾華丁は非常に象徴的である。彼は1927年南洋商報の洪荒に執筆していた頃は、次に引用するような幻想的な物語やメルヘンの世界を描いていたのである。

…漁夫的事、飛魚自然不知道、就是鬼子的風声、也断不曾打從飛鼠的耳朵边經過、因此都不作預備。

当大陽爬上東山的時候、水族裏、飛魚依旧展着翅子飛着、跑着、但、当漁夫の網打下的時候、他着忙了……。

同時、林族裏、小飛鼠正低着頭鑒賞他的肉翼、忽然、兒子的獅筒也到了、他只一發昏、於是也就茫然。

当日漁夫捉回飛魚、兒子捉回飛鼠、一箇小小的家庭、頓覺暖和得多。但是、仔細一看、……他倆一頓思量、於是眼眶一紅、鼻樑一酸、於是、漁夫放了飛魚、兒子也放了飛鼠。……這之間、飛魚冷靜的回到牠的家裏、而飛鼠也平安地飛回林間。

夜咻咻的吞咽了世界、於是漁夫啊、兒子啊、一發蹲在夜的夢中、飛鼠和飛魚、自然也蹲在夜的夢中。……

訳： 漁夫の事を飛魚は知らなかった、その子のうわさも蝙蝠の耳元を通り過ぎなかった。……なので、皆何の備えもなかった。

陽が東から昇る頃、海では飛魚が翅を広げて飛びまわる、だが漁夫が網を投げれば、彼は大慌て……。

その時森で蝙蝠が、頭を下げて翼の自慢、突然子供の仕掛けが飛び、目が眩んで後は気絶。

その時漁夫は飛び魚を、子供は蝙蝠持ち帰り、小さな家庭の暫しの団欒、それでもよく見れば……二人は暫し考えて、哀れに思い眼元も赤く、漁夫は飛魚を、子供は蝙蝠を放してやった。……こうして飛魚も家に帰り、蝙蝠も森に戻った。

夜はシーンとして世界を呑み込み、漁夫も子供も夜夢の中、蝙蝠も飛魚も夜の夢に蹲る。

……

しかし1929年には「拉子」、「兩般境界」、「五兄弟墓」等の戦闘的短篇を発表するようになったのである。例えば「五兄弟墓」は、植民地に売られて来た5人の苦力が、園主の虐待に対する積年の恨みを5本の鎌によって晴らすという筋立てである。内容的には優れた作品とは言いがたいし、言わば編集の曾聖提が離脱す可しとする「刀と血の浅薄な」作品なのではあるが、以前とは全く違った作品を書き始めた所に、プロレタリア文芸思潮の興隆を象徴する作家として挙げることが出来るし、また政治行動に突出して混迷する左翼政治状況下の青年の情緒を代表するよう人物ではないかと思われるのである。

こうして当初から戦闘的な姿勢を示す文芸副刊もあったが、一方では着実な議論を重ねて独自のスタイルを創造しようとする流れがあった。『椰林』は1929年6月に陳鍊青が編集を始めると、南洋の地方色を取り入れることを提唱する一連の評論文を発表し「創造南洋文化」を主張するようになる。彼が「文藝與地方色彩」(1929.9.23)の中で言っているのは、華人文壇には中国から来ばかりの人が多く、中国に題材を採る作品が多く、南洋文学という意識がない、地方には地方の特色があり、そこで各々の文芸は生長するのであるから、南洋の地域的風物をより創造的に描写す可きである、という感想なのであるが、これを単に「南洋の風物を描写するだけでは浅薄である⁽⁵⁰⁾」と論断するのは早計であろう。と言うのは1929年代の華人文壇の論争の主題は、この地方色彩と同時に「南洋文化の創造」が並行して論じられており、両者は分けて論じることは出来ないからである。陳鍊青は7月24日の「編者第二次的献詞」の中で「華人は南洋を拓殖し始めてからすでに久しいが、算盤を弾くのに忙しく、文化の創造には全く心を配らなかった。北米開拓は華人とともにあり、すでに一種の文

化を創造している。…凡そ南洋の文化を創造するには目標を同じくする知識青年が連合しなければならない」と言って論争に参加するのである。当時『椰林』紙上で行なわれた論争は、黄僧の「⁵²⁾學術文化興南洋華僑」(1929.7.2)に始まる。彼は「南洋華僑には悠遠の歴史と経済的背景があるのだから、アメリカにおけるイギリス人の様に一つの文化を生み出す可きであるが、それが出来ないのは、中国の伝統思想に縛られて、政治に無関心であることと、南洋をあくまでも客寓の地であると考えているからである。だから南洋を故郷として、そこに華僑の文化學術を創造することが進歩である」と言うのである。華僑文化の図面は示されていないが、この議論で重要なことは、その建設の為に為す可きことを徐々に言及して行く所にある。黄僧は続いて「給一般志在南洋文藝的朋友」⁵³⁾(7.24)の中で「時代の思潮を動かし、大衆を覚醒させる唯一の方法は文芸という武器である。近代中国革命においても文化運動の前衛であったし、中国人の社会においては文芸の使命は特に重要である」と言って文芸の意義を述べ、そしてその使命を知る為に、南洋の時代背景を分析し、植民地主義の下での貧困、罪悪、悲劇を述べ「南洋文芸界の精神は何であろうか、反抗と奮闘の中に死するだけである。そして我々民衆、平民の貧苦の文芸を創造しなければならない、これこそ時代背景を映し出した真の南洋文芸のある可き精神である」と結論するのである。曾聖提の言葉に較べると隔靴搔痒の感を免れないが、黄僧が続いて南洋學術研究会を発足させ、「まずは小人数でも、海辺の草地で談論しよう」と言って、会員を募るという具体的組織活動に結び付けていることから分るように、一連のこの議論は、むしろ政治運動に直結して行く性質のものであった。この時期の多くの文芸副刊が『文芸週刊』に代表されるように階級闘争、反帝反植地主義の旗幟を明確にしている時であるが故に、隔靴搔痒の議論の本質はそこにあったと言えよう。黄僧自身も実は文芸とは疎縁な人であったのである。このことは、マラヤの左翼政治運動の急務である浸透・宣伝活動に連なる所に位置付けられるものである。さらにこれに加えて「南洋的色彩」の議論が、1930年代の議論のテーマである南洋文芸の方向作りに一役を担うのである。

南洋文芸の方向論争は、1930年3月星洲日報の副刊『野葩』に掲載された陵の「⁵⁴⁾文藝的方向」と題する一文に端を発する。陵は当時の多くの作品がプロレタリア文芸の流行を反映した内容になっていることを批判し「第四、第五階級に偽りの同情を表わし、頭の中で暗黒の虚構を作り出しているが、こうした描写は書けば書く程に、人生からは離れて行くものだ。……我々一般の労働者は、一日8時間の労働の後必要なのは、精神的休養と疲労の回復なのであって、苦しみを叫び続け、人生を否定するような作品は、無意味な息苦しさを増すばかりである。……だから現代の文芸は目標を誤り方向を間違えている。それは我々が必要としている文芸ではない。悪魔派の様に醜悪と虚偽ばかり書く可きではないし、唯美派の様に頹廢的でもない、……我々は真、善、美の中に人生の意義を見付けなければならない。我々は民族固有の本性を発揮し、全ての人生に適う様な新しい国民精神のモデルを造らなければならない。つまり今後は肯定の文学を建設しなければならない」と言うのである。中国では左翼作家聯盟に対して、王平陵、朱應鵬、黄震避等が民族主義文芸の陣営から挑戦したのだが、この陵の批判もそうした一方からの挑戦であったのである。これに対して4月には悠悠が「関於『文藝的方向』」を同副刊に発表し、プロレタリア文学の立場から反論を加え「言う所の肯定の文学とは何を示すのか不明確である。プロレタリア文学の肯定ならば、実にそうである可きだ。……また言う所の人生とはこの社会においては各種各様であるが一体如何なる人生を想定しているのだろうか。結局陵君の所謂「文芸の方向」も明示されていない」と言って、この問題に就いての議論を喚起した。そして幾つかの議論を経て、最後に滔滔が

結論的な方向を示す。「對於南國文藝の商榷」⁶⁵（『野葩』、1930.4.30）は彼の理論を展開する堅実な文章である。彼は南洋の文芸を築く為に、まず南洋社会を分析し「植民地経済は世界経済の一つの齒車であり、膨脹する資本の投下される、資源の豊富な所であり、しかも多人種の労働者大衆からなる社会である。3千人の労働者を擁する工場でも、華人は3分の1にも満たない。その他はインド人、マレー人である。……そして文化的には封建的考え方ははびこり非常に遅れているが、これは環境のせいである。例えば華人は、ほとんどが中国農村経済の崩潰に従い、食を求めてマラヤに來たものだが、同時に農村の封建的思想も持ち込んで扶植したのである。またそれは一部勢力に保護されもした」と略述し、そしてこの様な南洋において建設すべき文芸とは「南洋と世界経済の連鎖を考えれば、南洋文芸の方向はプロレタリア文学の建設にあることは疑いないことである。……固より南國にはその特質があるのだから、その地方的色彩を持った文学である可きだ。例えば植物をとってみても南國にはくっきりと映える椰子の樹や鬱蒼としたゴムの林がある、そこでは北國の濃艶な牡丹は花開くことはないのである。文芸も同じである。開明的な人が何処からか文芸を持って來て此に植えたとしても、その成長は望み難いものだ。であるから南國の文芸は、現代段階では積極的には各民族労働者大衆の組織化と社会改革の文芸であり、消極的には社会の封建的暗黒を暴露する文芸である可きである。しかもその他の改革全般と直接或は間接的に繋がり、偉大な潮流に向って行くものでなければならない」。こうしてマラヤにおけるプロレタリア文芸は、マラヤ各民族労働者大衆を組織し、社会改革を進めるという方向性を明確に示したのである。そして南洋的色彩とは、マラヤの労働者の情況がマラヤ固有のものであると同様の意味で、プロレタリア文芸の中に位置付けられることになったのである。1930年は、1月に南洋共産党がマラヤ共産党へと発展的に改組され、コミンテルンの極東ビューローの直接指導の下に、華僑社会に止まらず、マラヤの各人種に対して浸透、組織活動を展開しようとして新たに歩み出した年であった。

文芸の方向が議論されているこの時期に、一方では1月から『椰林』の編集を始めた潘衣虹が「新興文学的意義」、「新興文学之歴史使命」、「新興文学的内容問題」、「新興文学的形式問題」、「新興文学的大衆化問題」等の一連のプロレタリア文学理論を論じる文章を発表し、方法論を展開しているのである。その論点は「プロレタリア文学の使命は大衆を教導することであるから、大衆の生活に密着した題材を使い、大衆に合った平易な表現を以て書き、作品を大衆から遊離させてはならない」（「新興文学的大衆化問題」5.3）と主張し、さらに内容については「階級闘争を正面から捉え、労働者の情緒、意識、気分等の感覚に基づいて、作品内容を展開す可し」と言うのである。中国左翼作家聯盟が「中国無産階級革命文学的新任務」の中で題材、方法、形式等の創作上の問題に関して「労働者農民に分かるような、彼等の親しんでいる言語文字を使わなければならない」と明確な指示を出したのは1931年11月の執行委員会決議であったが、この問題は夙に創造社が革命文学を提唱し始めた時に「我々は表現の媒体を、農工大衆の用語に近付けなければならない」（成仿吾『从文学革命到革命文学』）と主張していた事であり、左翼作家聯盟は当初から大衆化を文芸運動の中心としていたのである。潘衣虹の一連の論説は、マラヤの華人文芸の方向性に、中国文壇から方法論をもたらしたと言うことが出来よう。潘衣虹は福建人で、1930年初頭にマラヤに來て『椰林』の編集を手掛け、7月には身を引いて華僑中学で教鞭を執っていたというのであるから、恐らく先に述べた同校の紛争にも深く関係したであろう。その後道南学校の校長を経て、抗戦時期に帰国し、文芸

とは疎遠であったという。短期間にマラヤ華人プロレタリア文芸に動力を与える論説を多数発表して左聯の思想を伝え、作品らしきものは何も残さずに去って行く彼の軌跡は、文芸活動としてよりはむしろ当時の華僑左翼政治に一定の目的を持って現われた人物と考える可きであろう。華人文芸史上の作家には背景の不明な人が多い。それらの多くは青年教師達であったが、個個には検討に耐える資料があまりに少ない。

作品について多く紹介する余裕はないが、以上のような方向性と方法で書かれている作品の例として、浪花の「生活的鎖鍊」の要旨を以下に紹介したい。と言うのは作者は当時華僑中学に在籍し、数種類の文芸副刊の編集にも参加しており⁵⁹、恐らく潘衣虹の教導の下で習作ではないかと考えられるからである。決して優れた作品とは言えないが、「南洋の地方的色彩の衣裳を纏わせたプロレタリア文学」と言うことができよう。

私生児福来は偶然出生の秘密を耳にするが、夜学の教師に啓発され自棄的にならず、貧しいが故にゴム園の白人技士に身を任せ、苦海に身を沈め一生を終えた母親の悲劇を想い植民地主義に対する復讐を誓う。自らも失業して流浪の労働者となり、やはり流浪する老人開龍の体験に共感し、福来は階級闘争に目覚めて行くのである。開龍は故郷に父母を残し、若年にして南洋に希望を求めて出て来た中国の貧農であるが、斯かれてペラクの森林開拓労働者として売られ、20年の「猪仔」生活を送って来た。森林はゴム園となり、工場も出来たが、ゴム相場の下落の皺寄せは労働者にかかって来るのである。開龍は労働者を糾合して抗議行動を起すが、暴力と金銭で分断される状況下で、彼は仲間を売ることを抗み、結局流浪の生活を選んだのである。

プロレタリア文学の興起は数年で挫折してしまう。もちろんデュクルーの逮捕と、それに続く植民地当局の摘発が大きく影響しているのである。マラヤに「南洋文化を建設」することや「文芸に南洋的色彩の衣裳を纏わせてプロレタリア文学を展開する」という方向性は、華僑の定住化が進み「南洋が故郷」にならなければ実現し難い事であった。1931年前後のマラヤでは、中国生まれの華僑が華僑人口の69%を占めており、華僑の定住志向は極めて希薄であった。しかも華僑有業者人口

の中に下層産業労働人口が70%も占めながら(表1)組織、浸透活動の効果も上がらず、済南事件をめぐる運動でも、商会と国民党支部勢力の運動の方が優れた動員力を示しているように、一般華僑大衆は保守的で、素朴なナショナリズムに支配され、文芸に表現されるような戦闘的階級意識からは程遠い状況であったと言えよう。これは表2に見られるように、識字率が華僑人口の3分の1程にすぎな

表1 マラヤ華僑階級別人口構成(1931)

業 種		人 口	総人口比	有業者比
上層	農園、鉱山経営 建築、金融業	14,385	0.84%	1.53%
中層	農 業、商 業 技 師、教 師 事 務、教 員 等	261,055	15.32%	27.72%
下層	各産業労働者	665,430	38.9%	70.75%
有 業 者 合 計		940,870	—	
失 業 者		755,828	44.23%	—
不 明		12,674	0.72%	

出所：『華僑の研究』190-203頁より作製。

いことから考えられることである。木然が「關於新興文学的幾句話」の中で「大多数の労働者と少数のプチブルは金儲けと享樂の道を進み、生活も極端な圧迫を受けているわけではないから、どうして彼等が立ち上がることができようか」と指摘しているのは、理論と現実の撞着に対する歎息である。

また数多くの文芸

副刊が掲載された華字紙の発行部数(表3)と民度表を対照すると分るように、シンガポールでさえ読書人口 196,072人に対して4紙を合計しても38,000部に過ぎなかったのである。

しかし、だからこそ文芸を先鋒として南洋の文化をうち建てなければならなかったのではある。

4 結 語

この時期の華人文芸は、やはり中国本土の文芸思潮と密接に係りながら、南洋という地方情況に根差したプロレタリア文芸の創造という方向性を提示した。それは南洋に華僑の独自の文化を建設するためなのであった。そしてプロレタリア文芸の役割は、マラヤの各人種を組織し、社会改革を進めることにありと言うのであるが、華人文芸はあくまで華僑社会内に留まるものだから、政治的側面の具体的進行は、現実の労働運動或はマラヤ共産党の組織活動に、多人種構成要素が如何に吸収、反映されるかという実際の政治運動において検証される可き問題なのである。しかし現実について見れば、商界、国民党の保守勢力の指導力の方が優勢であり、加えて植民地当局の取締りの前に、左翼政治は混迷し、結局組織基盤の形成という方向に進む。そこに文芸の役割は位置付けられるのだが、文芸自体が十分発展する間もなく、現実の政治事件によって挫折してしまったのである。時代の先鋒というより、時代の情況に流されてしまうのが、マラヤ華人文芸の現実なのであった。

表2 マラヤ華僑民度統計(1931)

	読 書 人 口	読書不能人口	千人当り読書人口	5才以上 千人当り読書人口
S S	196,072	467,446	296	346
F M S	247,352	464,188	348	409
N F M S	86,614	237,743	—	—
計	530,038	1,169,377		

表3 マラヤ主要華字紙発行部数(1930)

シン ガ ポ ー ル	星 洲 日 報	15,000
	南 洋 商 報	9,500
	新 国 民 日 報	5,000
	総 滙 新 報	8,500
ペ ナ ン	梹 城 新 報	3,000
	光 華 日 報	4,000

出所：『南洋華僑抗日運動の研究』

163—165頁

註

- (1) 拙稿「マラヤ華人文芸の発展と背景I 1925-1928」、『三重大学人文学部文化学科研究紀要』第2号、1985年3月。
- (2) Ku Hung-Ting, *Kuomintang's Mass Movement and the Kreta Ayer Incident (1927) in Malaya*, Occasional Paper No 13, Institute of Humanities and Social Sciences, Nanyang University, 1973, P21.
- (3) Leong, Stephen Mun Yoon, *Sources, Agencies and Manifestation of Overseas Chinese Nationalism in Malaya, 1937-1941*, Ph. D thesis, University of California, 1976, P208.
- (4) *ibid.*, pp. 207-208.
- (5) *ibid.*
- (6) *ibid.*
- (7) *ibid.*, pp. 211-213.
- (8) 楊進発『戦前星華社会結構與領導層初探』南洋学会, 1977年, 60-62頁。
- (9) 張永福 (1871-1958), 僑生, 潮州人。林義順、陳楚楠等と中国革命同盟会支部を設立した草分けの党人。富裕なゴム商人である。
鄭螺生は福建人で、若年渡南し、イポーで食料品店を経営。各地に支店を設けて成功した商人。同盟会時代はイポーの支部長であった。
- (10) 前掲『戦前星華社会結構與領導層初探』60-62頁。
- (11) Leong, *op. cit.*, p218.
- (12) *ibid.*, pp. 219-221.
- (13) 前掲『戦前星華社会結構與領導層初探』62-64頁。
- (14) Png Poh Seng, *The Kuomintang in Malaya 1912-1914*, Journal of Southeast Asia History, 1960, pp. 18-19.
- (15) *ibid.* T.H. シルコック教授やウンク・アブドル・アジズ教授は、植民地政府が華僑教育を注意深く監視したのは、マラヤを中国の一省として併合しようという思想があったからである、とするのに対して、Png Poh Seng氏は国民党支部の党規には、それに類するような条項も思想もなく、マラヤ国民党の役割は、中国内の自主政府の樹立と国防の確保など、中国本土に奉仕することにあつて、マラヤに権力を建てることではない、として反論し、さらにそうした思想はむしろ共産主義運動の方にあったと指摘している。
- (16) Lee Ting Hui, "Policies and Politics in Chinese Schools in Straits Settlement and The Federated Malay States, 1786-1941", Ph. D thesis University of Malaya, 1957, pp. 170-171.
- (17) *ibid.*, pp. 172-174.
- (18) Png Poh Seng, *op. cit.*, p30.
- (19) 楊進発, 前掲書, 43頁。
- (20) 同上, 41, 42頁。
- (21) 拙稿「マラヤ華僑社会の啓蒙」、『三重大学人文学部文化学科研究紀要』第1号, 1983年3月。
- (22) 第三調査委員会報告書『南洋華僑抗日救国運動の研究』東亜研究所, 昭和20年, 21-23頁。
- (23) 同上。
- (24) 楊進発, 前掲書, 32-35頁。
怡和軒倶楽部は、英語教育出身と華語教育出身の福建人指導者の交流を目的として林文

慶、陳若錦、顏永成等（英語系）と林友坂、陳禎祥、林推遷等（華語系）の商人が創設したもの。

- (25) 陳嘉庚については『東南亜華裔聞人傳畧』（南洋学会、1977年）25－34頁に略伝がある。また『陳嘉庚先生記念冊』（中華全国帰国華僑聯合会、1966年）にその功績が顕章されている。さらに彼自身の著述には『南僑回憶録』（草原出版社、1979年）があり、その思想と活動を知ることができる。
- (26) 楊進發、前掲書29頁。
- (27) 同上、35頁。華人參事局は、植民地政府と華人社会とのパイプとして設けられたもの。
- (28) 同上、70頁。
- (29) 同上、30頁。
- (30) 同上。
- (31) Gene Z. Hanrahan, "The Communist Struggle in Malaya" Uulversity of Malaya Press, 1971, p 21.
- (32) ibid., pp. 35－36.
- (33) ibid., pp. 28－29.
- (34) 前掲拙稿、72, 73頁。
- (35) Hanrahan, op, cit., p31.
- (36) Brimmell, J.H, "Communism in South East Asia" Oxford University Press, 1959, p94.
- (37) Png Poh Seng, op, cit., p31.
- (38) ibid.
- (39) Hanrahan, op, cit., p36.
- (40) Leong, op, cit., p232.
- (41) Hanrahan, op,cit., p32.
- (42) ibid., p23.
- (43) Brimmell, op. cit.
- (44) Hanrahan, op. cit., p40.
- (45) Lee Ting Hui, op. cit., pp. 212－214.
- (46) ibid., pp. 215－217.
- (47) 長井信一『現代マレーシア政治研究』アジア經濟研究所、1978年、38, 39頁。
- (48) 曾聖提「醒醒罷、星城的藝人」『文芸週刊』、1929年1月18日、方修編『馬華新文学大系』1卷、星洲世界書局、1972年、127－129頁所収。
- (49) 方修編『馬華新文学大系』1卷、144－146頁所収。
- (50) 苗秀『馬華文学史話』青年書局、1968年211, 212頁。
- (51) 同上、142、143頁所収。
- (52) 同上、135－138頁所収。
- (53) 黃僧「介紹南洋學術研究会與一般朋友」椰林、1929年7月25日、前掲『馬華新文学大系』139－141頁所収。
- (54) 同上、彼自身「論到文藝、我是最淺薄、絲毫沒有途徑之一人」と語っている。
- (55) 同上、69, 70頁所収。
- (56) 同上、80－83頁所収。
- (57) 同上、110－112頁所収。
- (58) 方修『馬華新文学史稿』世界書局、1975年、199頁。
- (59) 同上、190頁。

(60) 同上、113—115頁所収。

**The Development of Malayan Chinese Literature and the
Political Impact From Mainland China, II 1929—1931**

Shigeo Arai

In the History of Malayan Chinese Literature, the period of 1925—1931 is considered as the time of expansion. I have tried to examine its development for the period of 1925—1928 in my last essay, with special emphasis upon the political relation between Mainland China and Malayan Chinese Society, in which the role of China's political movement as recruiting ground of writers, resource of political thoughts, and some measures which adopted to the Malayan Chinese Movement were defined, also important aspects of Malayan Chinese Literature were pointed out.

In this paper, continuously, I have examined the succeeding years of this period 1929—1931 in the same way. Particular aspects of this period were the split of the Malayan Chinese political power as the result of the split of Kuomintang and Communist Party in Mainland, and the movement of Malayan Chinese Literature assumed clear aspect of Proletarian Literature according to the rampancy of Chinese leftist movement. All of these conspicuous aspects in this period were ceased after the arrest of French Comintern agent Joseph Ducroux in 1931.